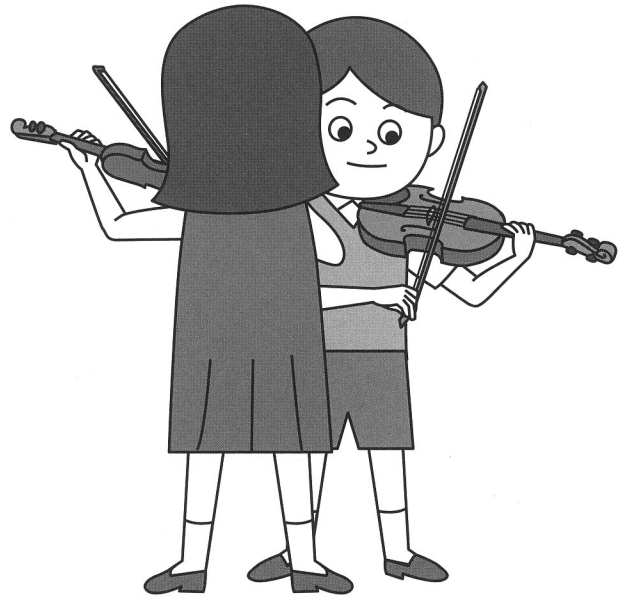
脳と才能

連載第5回
酒井 邦嘉
東京大学教授・言語脳科学者

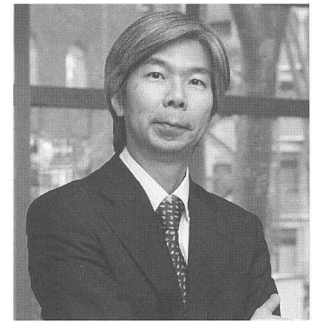
「真に偉大な人々は、優越感も劣等感も、もたない人々であり、向上心の中にのみ真実への道を歩いていった人々である」

『鈴木 鎮一のことば集 ー心を育てる』 p.43
（公益社団法人才能教育研究会、2018年）より。
才能教育研究会本部事務局、東京事務所で販売中。アマゾンでも購入可。500円（税込）

鈴木鎮一先生のお言葉を紹介しながら、その奥義を科学で考えるという連載です。才能教育研究会がめざす「才能」には、どのような意味が込められているのでしょうか。そしてその才能は、脳のどんな働きに支えられているのでしょう。



バッハの「ドッペル」を合奏する二人。決して競争するのではなく、互いの響きを聴き合いながらの演奏ですので、幸せな気持ちがあふれています



酒井邦嘉（さかいくにより）
1992年東京大学大学院理学系研究科博士課程修了、理学博士。専門は言語脳科学で、人間に固有の脳機能をイメージング法などで研究している。主著に『言語の脳科学』『科学者という仕事』『科学という考え方』（中公新書）、『脳の言語地図』『ことばの冒険』『こころの冒険』『脳の冒険』（明治書院）、『脳を創る読書』『考える教室』（実業之日本社）、『芸術を創る脳』『高校数学でわかるアインシュタイン』（東京大学出版会）。

前回の連載で紹介した言語学者のノーム・チョムスキーは、まさに「向上心の中にのみ真実への道を歩いて」きた一人です。先日出版した『チョムスキーと言語脳科学』（インターナショナル新書）に書きましたが、チョムスキーは、たとえ反対者に対しても真摯に議論と向き合い、そしてさらに明晰な結論を探し当てることを常としています。言語を通し人間の本性を追究する先達として、脳研究を専門とする私も、チョムスキーを師と仰いできました。「チョムスキーをしのぐには、その読書量を上回る必要がある」と聞いたことがありますが、チョムスキーは比類がない読書人です。その探究は確かに険しい道ですが、誰が先に真実を発見するかという競争などとは無縁のものです。

学問や学校の勉強、そして楽器の習得は、その人の向上心の中にこそ大切な価値があります。初学者・初心者はもちろん、そして先生になってからも、「もう少しよく分かりたい、もう少し上手に弾きたい（吹きたい）」と思って、謙虚に鍛錬を続けられるような向上心を持ちたいものです。もし自分の実力が、他人と競い合うことで向上したように感じられるなら、それは思い違いでしょう。たとえ周りと比べて自分が一番のように見えても、世の中には必ずもっと優れた人がいますから。真の実力は、コンクールや賞などによって決められるものではないのです。

鈴木先生は次のように述べています。

「向上心は競争心とは全く違うと思う。向上心は音楽の世界で言うとすれば、例えば、クライスラーやティボーの立派な芸術的高さ、人間性の高さを目指して、自分を常に矯正しながら少しずつあの高い人達に近づいてゆこうとすること。〔中略〕そうした偉大なる人々を尊敬し、その方向へ己を一歩一歩近づけてゆこうとする心。このように、反省と自己矯正の中に自己を少しでも高く育ててゆく心こそ、向上心と言うべきではないか」（同p.41-42）

チョムスキーが人道的な見地から社会に向けて発言をするのも、その人間性の高さに由来します。世界の人々の間でさまざまな対立が激しくなっているときこそ、競争心を捨てることが必要なのだと強く感じます。

◇

脳科学には、「シナプス競合仮説」というものがあります。脳の成長が著しい幼少の時に限り、神経線維ができるだけ多くのシナプス（神経同士の接点）を作ろうとして、互いに競合するという説です。さらには、過剰に生じたシナプスの中から、その時の環境に必要とされるものを残すように刈り込まれ、脳の神経回路ができていくと考えられています。まだ確かな証拠はないのですが、楽器の演奏にかかわる脳の聴覚野や運動野の発達は、そうした幼児期の環境から影響を受けるのかもしれません。

そうした細胞レベルで脳に起こる競合や、生物界や進化において個体・種のレベルで生存競争があるからといって、それを人の生き方に結びつけてしまうのはあまりに乱暴です。「一緒に勉強している者同士が、少しでも自分より教材が先へ進むと、後れたという感じを抱く人々。わが子が他の子供たちより、おくれると、大きな不満を抱く親の競争意識、そうした不幸な心の働きは、皆 優越感と劣等感の世界の中に自分を不快にし、自分の人間価値を益々低くする働きをしてゆくだけのことに過ぎない」（同p.42）と鈴木先生は明言しています。

◇

不幸な競争心を捨てて、向上心の中に生きること。その高い理想が、才能教育ばかりでなく、学校教育にまで浸透していくことを願わずにはいられません。子どもの才能を引き出すための秘訣は、まさにその一点にかかっているのではないでしょうか。このことは、勝負を伴う囲碁・将棋やスポーツの世界でも、まったく同じだと私は考えています。